

# 巻頭言

## 「コロナとウクライナ侵攻」

理事長 新谷友良

公園のつつじと藤が満開で、ベランダの杜若（カキツバタ）も咲きだしました。東の間の気持ちの良い季節です。からだのすみずみのこわばりが緩みますが、その一方でコロナやウクライナ侵攻と、目や耳に届く情報は緊張に満ちています。

1960年代の終わりごろ、大学に入る前だったと思いますが、「戦艦ポチョムキン」という映画が公開されました。生意気盛りで、「この映画は必見」と誰かからいわれたか、新聞に載っていたか、京都の三条河原町にあった映画館に一人で見に行きました。

「帝政ロシアの戦艦ポチョムキンで乗組員の反乱があり、射殺された乗組員を悼むオデッサ市民が帝政の打倒を叫んで集まる。突然現れたコサック兵が階段を降りながら市民に向けて発砲する。幼い息子を撃たれた母親が息子の遺体を抱きかかえて近づいていくが、コサック兵は母親も射殺する。側にいた老婆は殴られて流血し、乳母車が階段を落ちていく」、映画史上で有名な「オデッサ（ポチョムキン）の階段」のシーンです。

改めて地図で確認すると、クリミア半島を挟んでオデッサ（オデーサ）と今回ロシアが侵攻しているマリウポリとは東西約1,000Kmの距離にあり、100年以上前にウクライナ西部で起きた「オデッサの階段」の惨劇が既視感をもって東部で再現されています。黒海沿岸のロシアを困む国の悲劇は、複雑な姿で繰り返されている感じがします。

「戦艦ポチョムキン」の反乱から少しして、第一次世界大戦中の1918年から1920年ぐらいまで「スペインかぜ」の流行がありました。患者数は世界中で約5億人、死者は4,000万人以上（WHO）といわれています。今回の新型コロナウイルスは、4月26日時点で世界中の患者数5.1億人、死者622万人と報告されていて、死者の数が大きく減少し、医療技術や公衆衛生の進歩が見て取れます。

パンデミックと戦乱が追っかけ合って歴史を作っています。これに自然災害を加えると、障害者権利条約のいう「危険な状況及び人道上的緊急事態」が身近に感じられます。「世界人権宣言」や「国際人権規約」では抽象的にしか考えられていなかった「緊急事態」に、障害者の視点を加えることで具体的に見えてくることがあります。できることはわずかですが、ウクライナへの支援を込めて「国境なき医師団」へのカンパを増やすことにしました。